

丘の上。そこに一軒の家がある。白い壁で、門の入り口には「学びの家」と大きく書かれている。ここはいわゆる親に捨てられたり身寄りのない子供たちが集まって暮らしている施設である。そこに一人の少女が住んでいる。名前は光。光は生まれて間もなく親に捨てられ、この「学びの家」にやってきた。親の愛情を知らない光はそれは酷く親を憎んでおり、同時に自分が必要のない子だと思っている。友達に施設の仲間だけ。そんな光に思いもよらない出来事が起こるところからこの物語は始まる。

起きて顔を洗うところから私の一日は始まる。毎日が平凡で何も面白い事が無い。学校に行っても友達がいなかったためずっと一人。入学したての頃は何人かは声をかけてくれた。でも、私の家庭を知るとみんな離れていく。みんな陰で私の事を可哀想な子と言っているらしい。親がいなくても可哀想だなんて決めつけたくない。それから私はみんなそんな目で私を見ているんだと思えば友達を作ることをやめた。学校で笑うのも止めた。自分は可哀想な子なんかじゃない。一人でもやっていけると自分に言い聞かせて……。

ある日私は委員会の集まりで帰るのが遅くなってしまった。帰る準備をして教室を出ようとしたら、誰かが急に勢いよくぶつかってきた。

「いたっ」

「ごめん、今急いでるから」

ぶつかってきた子は漫画とかであるようなセリフを言い残し、勢いよく走って行った。すると先生がこっちに走ってくるのが見えた。

「おい、佐伯を見なかったか？」

先生は肩で息をしながら聞いてきた。佐伯ってさっきぶつかってきた女の子の事かな。

「いえ、見ていません」

先生はそうかと言いつつ、また走って佐伯という女の子を探しに行った。さっき何で見えないなんて言ったんだろう。正直にあつちに走っていききましたよと言えば済んだはず。この頃から光の中で何かが変わり始めた。

次の日、校門を抜けたところで昨日ぶつかってきた子が立っていた。

「昨日はありがとう。おかげで先生から逃げ切れたよ」

ぶつかってきた子はそう言い、にこにこしていた。すぐく笑顔が似合う子だなと思ったのが第一印象だった。

「別にお礼を言われるようなことしてないよ」

私の悪い癖だ。素直に気にしないでと笑って言えばいいのに私にはそれが出来ない。すると女の子はこつちをじっと見てきた。

「な、何か」

「ううん。とても綺麗な顔つきだなと思って」

そんなこと言われたのは初めてだったからどうしたら良いのか分からず一人で悶々としていたら、

「可愛い。そんな顔もするんだね。あ、自己紹介がまだだったね。私は空っていうの。佐伯空。1年3組だよ」

「私は山根光。1年4組」

「隣のクラスだね。これからよろしくね。光ちゃん」

こうして私は空と知り合いになった。その日は空の事をずっと考えていてあつという間に放課後になっていた。その夜、ご飯を食べていたら施設の先生が、

「光ちゃん。今日は何かいいいことでもあった？ 久々に光ちゃんの楽しそうな顔が見れたわ」

と嬉しそうにこちらを見ながら言い去っていた。

何を浮かれていたのだろう。私は誰からも必要とされていないんだから。どうせあの子だって私の家庭を知ったら逃げ行くのよ。今までそうだったじゃない。私はこれからも一人で生きていかなくちやいけないのよ。一人で……。

しかし、私の考えとは裏腹に空は毎日のように私のクラスに来て私に話かけてきた。クラスの子たちはそれを見てひそひそと何か話していた。しかしその様子に全く気付いていないかのように空は楽しそうに話している。そんな空が私はいつも羨ましかった。空と知り合って一週間が過ぎたころ。次の時間は理科室に移動だったため3組の前を通っていると、廊下からでも聞こえるほど大きな空の声が聞こえてきた。覗いて見ると空はクラスの中心的人物のようで多くの男女に囲まれていた。そんな空を見てみると、

「あ、光ちゃんじゃん。おーい」

空が私に向かって大きな声で手を振っている。そのせいで私は空の周りにいる人一斉に見られ、いても経ってもいられず走って逃げてしまった。理科室に着き私は冷静さを取り戻し改めて焦っていた。今のは絶対感じ悪かったよね。でもどうしたら良いんだろう。こ

のままじゃダメなのは分かっているけど……。うん、ここは素直に謝るべきだよ。私は放課後に謝ることを決意した。

放課後、先生に用事を押し付けられて空に会うのが遅くなってしまった。3組を覗くと空が見えたので声を掛けようとしたら他の男女も見えた。今日空と話していた子たちだ。明日にしようと思ひ帰ろうとしたら、

「ねえ空。最近4組の山根さんと仲良いよね」

「うん。それがどうかした？」

私の話をしているのが聞こえてきた。空の友達の人である女の子が空に私との事を聞いているようだ。帰ろうと思っているのに足が全然動かない。何を言っているのか知りたいでしようというように。

「空、山根さんの事情知ってる？ あの子、小さいころに親に捨てられたらしいよ。で、今施設に住んでるんだって。ちょー可哀想だよ。ふふ。クラスでもかなり浮いてるらしいよ。だから、空もあんまり関わらない方がいいよ」

女の子は私の事をあざ笑うかのように空に話していた。やっぱりみんなそう思ってたんだ。何で今更になって友達が欲しいなんて思ってたんだろう。ほんと馬鹿だな、私。すると教室から思ってもみない言葉が返ってきた。

「あんたの方が可哀想だよ。そんな人の家の事情ぐちぐち行って何が楽しいわけ？ あんたはまともな人間だと思つてたのに残念だよ」

私は空がそんなことを言うとは思つてもいなかったものでびっくりして手が震えていた。空の周りにいた子たちも私と同じみたく、びっくりして目が点になっていた。私は手の震えがおさまらず、持っていた携帯を落としてしまった。

「誰かいるの？」

空はこっちを見て聞いてきた。気付かれた。そう思つた瞬間、私は一目散に昇降口に逃げた。走っていると誰かに腕を強く引っ張られ危うくこけそうになった。その時糸が切れたように涙が次々と止めどなく流れてきた。

「光ちゃん。さっきの話聞いての？」

空は小さな子をあやすような声で聞いてきた。私は声も出さず顔を縦にふった。

「そっか。ごめんね。あんな話聞かして。でも大丈夫だよ。光ちゃんにはあたしがついてるから」

「私と友達になつてくれるの？ 私を可哀想な子だと思わない？」

「当たり前じゃん。そのために毎日光ちゃんの教室に行ったんだから。それに可哀想な子なんて思うわけじゃないでしょ。初めて会った時から光ちゃんの事気になってたんだ。って何だか告白してるみたい」

私たちはお互い大笑いした。心の底から笑つたのはいつ振りだろう。

「やっぱ光ちゃんは笑顔がよく似合うよ。名前にぴったりだね」

「あ、ありがとう。そんなこと言われての初めてだからすごく照れる。でも、友達って何をしたらいいの？」

「可愛すぎでしょ。そんなに深く考えなくてもいいんだよ。じゃあ、とりあえず一緒に帰りますか。あたし光ちゃんのこといっぱい知りたし」

「うん、私も空のこと知りたい」

今日から夕焼けに映し出された影は一つから二つに変わった。私の心を照らしたヒカリはちっぽけな出会いから始まった。私の本当の人生はここから始まるのかもしれない。

終わり